

コミュニケーション分断とディスコミュニケーションの可能性

——原発事故後の福島におけるユーモアと笑いを事例として——

一橋大学大学院・日本学術振興会特別研究員 庄子 諒

1. 目的・方法

本報告では、福島第一原発事故後の福島で暮らし続ける人びとにとって「コミュニケーション分断」がなぜ乗り越えがたい困難となっているのかについて、原発事故や放射能汚染といった福島が抱える問題にまつわるユーモアや笑いの実践に着目して明らかにすることを目的とする。

原発事故後の福島においては、放射能汚染が安全か／危険か、といった二項対立が激化するなかで、住民間のディスコミュニケーションが生じ、コミュニケーション分断が形成されている（平井 2015）。住民たちは関係悪化を避けるために放射能汚染についての話題をタブー視し（成ほか 2015）、二分法的な立場性では語れない矛盾や葛藤を抱えたまま、沈黙に陥ってしまう。

しかし、事故後の原子力立地点住民どうしの生活保全に関する研究では、むしろ異なる他者の言動に直面することで、既存の考え方を自省し、住民が抱える矛盾を踏まえつつ新たな思考と実践を創造していく可能性が見出されている（山室 2012）。言い換えれば、住民間のディスコミュニケーションによってこそ、二分法的な枠組みを乗り越える契機が生まれる。したがって、コミュニケーション分断を、ディスコミュニケーションの可能性という観点から捉え直す必要があるだろう。

そこで本報告では、ユーモアや笑いの実践に着目する。笑いは「図式のズレ」（木村 1983）によって生じると考えられ、ユーモアとはメッセージにズレや矛盾をあえて仕込むことによって遊びや笑いを生み出そうとする、いわば仕掛けとしてのディスコミュニケーションである。

報告者はこれまで、福島県中通り地方の都市部をおもなフィールドとして調査を行ってきた。本報告ではそのうち、2016年以降、福島市で実施した原発事故後における笑いやユーモアの実践に関する住民へのインタビュー調査から得られたデータを中心的に取り上げ、分析を行っていく。

2. 結果・結論

分析の結果、発災まもない時期には可能となりえていたユーモアや笑いの実践が、賠償をめぐる線引きによる構造的格差や、それに対する不公平感、不満、偏見などによって根深くなっていく分断のなかで、困難なものと考えられ、自粛されやすくなっていったことが確かめられた。

笑いは「不本意な現実のリアリティを剥奪・無化する」（木村 1983）。そのことは、現実の拘束から自由な「あそび」の領域への移行を可能にし、実生活の実利や理想主義的な真面目さの行きすぎ、硬直化、既存の秩序や権威を批判するパースペクティブを提供する（井上 1977）。

コミュニケーション分断の困難とは、むしろそうしたディスコミュニケーションが持つ可能性を閉ざしてしまう点にこそ存在し、そのことが住民に不自由さや閉塞感を与え、矛盾や葛藤をそのままに沈黙を固定化させていると考える。翻って、コミュニケーション分断の克服を模索するうえで、ディスコミュニケーションを悪として除去し理性的な対話を望む「完全なるコミュニケーションの神話」（鶴見 1991）を相対化し、ディスコミュニケーションを常態として含むコミュニケーションのふくらみや豊かさに目を向ける必要があるのではないだろうか。

【文献】

◆平井朗, 2015, 「原発とコミュニケーション——福島と水俣をつなぐ平和学の視点から」 関礼子編『“生きる”時間のパラダイム——被災現場から描く原発事故後の世界』日本評論社, 64-85. ◆井上俊, 1977, 『遊びの社会学』世界思想社. ◆木村洋二, 1983, 『笑いの社会学』世界思想社. ◆成元哲・牛島佳代・松谷満・阪口祐介, 2015, 『終わらない被災の時間——原発事故が福島中通りの親子に与える影響』石風社. ◆鶴見俊輔, [1952] 1991, 「二人の哲学者——デュイの場合と菅季治の場合」『鶴見俊輔集 2 先行者たち』筑摩書房, 274-87. ◆山室敦嗣, 2012, 「問われ続ける存在になる原子力立地点住民——立地点住民の自省性と生活保全との関係を捉える試論』『環境社会学研究』18: 82-95.